思いやり尺度の作成と妥当性の検討¹

京都大学 内田由紀子²・北山忍

Development and validation of a sympathy scale

Yukiko Uchida and Shinobu Kitayama (Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, Yoshida-nihonmatsucho, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501)

The authors developed a 22-item scale of interpersonal sympathy that is informed by relevant practices and meanings of contemporary Japanese cultural context. In three independent samples the scale was shown to be reasonably reliable ($\alpha > .80$). Furthermore, the scale had a systematic relationship with related variables, hence exhibiting satisfactory construct validity. Specifically, sympathy was positively correlated with both a reported frequency of prosocial behaviors (Study 1) and emotional empathy (Study 2). Moreover, sympathy formed a higher-order factor with interdependent construal of self, which was orthogonal to another higher-order factor comprised of independent construal of self and self-esteem (Study 3). Finally, some directions for future research are discussed.

Key words: sympathy, Japanese culture, interdependence.

心理学における近年の比較文化研究では、相互協調性 (Markus & Kitayama, 1991), 集団主義 (Triandis, 1995), あるいは社会中心性 (Shweder & Bourne, 1984) などが東洋の諸文化の特徴としてあげられている。これらの理論的立場はいずれも東洋の文化が他者志向的であるという点において一致している。しかし、他者志向性の具体的形態は個々の文化や文化内のサブグループによって異なっている可能性がある。特に日本文化においては、他者志向性はしばしば“思いやり”という概念によって成り立っていることが指摘されている (レビューは Kitayama & Markus (1999) 参照)。たとえば日本における対人関係では、契約的な取り決めによる“互酬性”よりも情による結びつきや思いやりが重んじられる (浜口, 1988)。また、他者の立場に立って自分に言及する語用法 (母親が子どもに向かって自分のことを“お母さん”と呼ぶなど) が定着しているが (鈴木, 1973), これは思いやりに基づいた行動傾向が高度に慣習化した例である。同様の現象は他者知覚においてもみられる。日本人は当人の

立場をとり、その“気持ち”に注目することが多いため、たとえ相手が道徳的に問題のある行為をしたとしても寛容な判断をしがちである (東, 1994)。さらに、土居 (1980) は“甘え”を日本文化における中心的感情であると論じたが、甘えとは、他者からの思いやりの (いささか過度な) 期待であると解釈しうる (山口, 1998)。

これらの知見から、日本における自己や関係性の性質を理解する際、思いやりの文化慣習とそれに連動した心理傾向を系統的に探索する必要があると考えられる。その第一歩として、思いやり傾向の個人差を測定する尺度を開発することの意義は高い。従来、思いやりや共感性についてはいくつかの尺度が用いられてきているが、後述のように、それらがどの程度日本における思いやりという心理傾向を包括的に測定しているかについては多少の疑問が残る。そこで本研究では、この点に留意して新たな尺度の開発を目指した。

従来の思いやりの概念についての研究を概観してみると、思いやりに含まれる心理傾向には大別して三つのものがあることがうかがわれる。第一は、向社会的行動への動機づけである。実際、共感性や思いやり研究の多くは向社会的、愛他的行動との関連で数多くなされてきている (レビューは杉森 (1996) を参照; 原田・狩野, 1980; 伊東, 1996; 菊池, 1988, 1998; 鈴木, 1992; 高木, 1998)。

¹ 本研究は、内田が北山の指導のもと、京都大学教育学部に提出した卒業論文に基づいている。本研究は文部省科学研究費による補助 (基盤研究 B: “日本的自己の諸相: 矛盾と統合のダイナミクス”, 代表者: 北山忍) を受けた。

² 日本学術振興会特別研究員。

思いやりに含まれる第二の要素として、菊池をはじめとする多くの研究者は、相手の感情状態を的確に判断し、相手と同じ感情を感じるという“共感能力”を挙げている (Eisenberg & Mussen, 1989 菊池・二宮訳, 1991; 菊池, 1988, 1998)。この点は第一の点と密接に関連している。それというのも相手に共感すれば、特に相手がなんらかの手助けを必要としているような場合には、向社会的な行動の頻度が高まると予測されるからである。

第三に、相手の気持ちの直感的理解 (察し) を挙げることができる。この場合、相手と同じ感情状態を経験する必要はない。むしろ重要なのは、相手からいわれるまでもなくその人物の気持ちをわかろうとする傾向とその能力である。向社会的動機づけと共感性の二つの要素は、洋の東西を問わず思いやりを定義する際に広範に用いられているが、“察し”は特に日本文化において重要視される点であると考えられる。実際 Travis (1998) は、日本文化における思いやりの重要性を指摘したうえで、それを相手の気持ちの直感的理解 (察し) とそれに基づく行動であると定義している。Travis は、“察し”の概念は特に日本語の“思いやり”に含まれる概念であり、英語の“sympathy”や“empathy”にはこれが含まれていないことを指摘している。

これらの知見を総合して、本研究では思いやりには“他者の気持ちを察し、その人の立場に立って考えること”、そのうえで“その気持ちや状態に共感もしくは同情すること”、そして“向社会的行動の動機づけとなる”という三つの側面があると仮定する。

既存の尺度においては、これら三つの側面が同時には考慮されていない。たとえば、加藤・高木 (1980) は、情動的共感性尺度を作成したが、これはもっぱら相手と同じ感情を経験するという意味での共感 (empathy) に注目している。桜井 (1988) によって日本語訳された Davis (1983) による多次元共感測定尺度も同様に共感に着目したものである。また、対人的価値尺度 (ゴードン・菊池, 1981) の下位尺度の一つに“他の人のためになることをする気持ちを大切に思うかどうか”という、思いやりの気持ちを扱った“博愛的価値”の尺度があるが、これは博愛主義という価値観を支持するかどうかについての認知的判断を扱ったものであり、思いやりの心理・行動傾向の測定をめざしたものではない。また菊池 (1988, 1998) は、日本における思いやり行動を、(1)結果として相手のためになり、(2)ある種のコストを含むが、(3)返報やお礼を目的に行われるものではなく、(4)自発的になされる、という四つの事項で定義し、これに対応した思いやり行動の頻度を測定する尺度 (向社会的行動尺度) を作成した (菊池, 1988)。しかし、この尺度が扱う思いやり行動は、そのような行動の準備状態

としての思いやりの心理状態とは理論的に区別されるべきであろう。そこで本研究では、上記の三つの意味の要素を包括的に含む思いやり尺度の開発をめざした。

研究1 思いやり尺度の作成

方法

被験者と手続き 大学生12名に、“思いやりのある人 (ない人) はどういう人だと思いますか”という質問に自由記述での回答を求めたところ、(1)困っている人の心情を察すること、(2)その人の立場に立って、共感し、暖かい気持ちを向けること、(3)その人に愛他的にふるまおうとすること、という先述の理論的定義に合致しているものが多くみられた。そこでこれらの記述を参考にして思いやりを測定すると考えられる55項目を用意した (うち16項目が逆転項目)。これらを質問紙にランダムに並べ、大学生男女127名 (男性97名、女性30名、年齢18-25才) に示し、それぞれが自分にあてはまる程度を5件法で回答させた (1=全くあてはまらない、5=非常によくあてはまる)。

さらに尺度の妥当性についての手がかりを得るために、人に対する暖かい行動三つ (“人からもらい泣きをしたことがある” “映画やテレビを見て涙がでたことがある” “困っている人をかわいそうに思って助けたことがある”) と、冷淡な行動二つ (“困っている人を無視したことがある” “何かで失敗した人を責めたことがある”) のそれぞれを行ったことがあるかどうかを回答させた。

結果

逆転項目のスコアを6から引き、これらの項目の総和得点が高いほど思いやり傾向が強いようにしたうえで、主因子法による因子分析を行い固有値を検討したところ、第4因子までは固有値が減り続けるが第5因子以降の減少はほとんどみられなかった³。そこで、4因子解が妥当であると判断した。バリマックス回転後の因子構造を検討したところ、第1因子には弱い者への親切心、第2因子には涙もろさ、さらに第3因子には他者に対する厳しさ (逆転項目)、そして第4因子には苦労や不幸への共感にかかわる項目がそれぞれ高い負荷をもっていた。これらは先の定義に合致する結果である。そこでそれぞれの因子内から、(1)意味や状況がなるべく多様になり、(2)全体として逆転項目がほぼ半数になり、(3)因子への因子負荷量ができるべく高いもの22項目 (うち逆転項目10項目) を選び、

³ 固有値は第1因子から順に、7.82, 2.81, 2.64, 1.94, 1.52, 1.36, 1.31, 1.07, 0.97, 0.78であった。

思いやり尺度とした (Table 1)。

これら 22 項目を対象に因子分析したところ、固有値は第 1 因子解が 4.34, 第 2 因子解が 1.52, 第 3 因子解が 0.70 であった。ここから 1 因子解か 2 因子解のいずれかが妥当であると判断できる。そこで、これら二つの解の関係を吟味したところ、2 因子解は 1 因子解に含まれる涙もろさに関する 4 項目 (“自分は涙もろいほうだとは思わない”, “もらい泣きしやすいほうだ”, “いわゆる ‘お涙頂戴もの’ の映画は好きではない”, “映画やテレビドラマを見てよく泣く”) が分離して成立していることがわかった。これらの 4 項目は 1 因子解を採用した場合に, 第 1 因子に含まれていた。2 因子解において第 1 因子を構成する項目の平均値と第 2 因子を構成する項目の平均値は, 正方向で相関していた ($r=.37, p<.001$)。そこでわれわれの当初の目的が “思いやり” という感情状態の包括的尺度の作成であることを勘案し, 本尺度においては 1 因子

解を採用することにした。当初の 4 因子解がこの分析で 1 因子解となった理由については, 各項目には項目間の共通性とそれ以外の意味があったためと考えるとわかりやすい。多数の項目を用いて因子分析する場合には, 全項目には共通しない意味が四つの因子というかたちで浮かび上がったのに対し, 項目数を減ざると相対的に共通性の比重が増し, その結果因子の数が減ったと考えられる。第 1 因子の説明率は全分散の 19.8% で必ずしも高くはなかったが, これは内容を多岐にわたらせた結果であると考えられる。実際, 思いやり尺度の信頼性は十分に高いものであった ($\alpha=.84$)。

尺度の平均値をみたところ, 22 項目の尺度の全体では 3.23 であった。過去の知見 (菊池, 1988) と一致して, 平均値は女性のほうが男性よりも有意に高かった ($M=3.42$ vs. $3.15, t(125)=2.28, p<.03$)。

加えて, 思いやり傾向と援助行動との関連についても検討した。それぞれの行動指標で, 暖かい行動を

Table 1
思いやり尺度

項 目	因子負荷量	項目-全体得点相関
#1 自分は涙もろいほうだとは思わない	.35	.40***
#2 一生懸命やっても失敗すれば意味はないと思う	.21	.32***
3 つらい思いをしている人のために祈るような気持ちになることがある	.46	.45***
#4 試合で自分が勝つためならば相手が怪我をしていても容赦しない	.39	.47***
5 頑張っている人を見ると応援したくなるほうだ	.54	.49***
#6 情にほだされたくない	.56	.62***
7 もらい泣きしやすいほうだ	.44	.52***
#8 人が失敗した場合その人に責任があるので同情の必要はない	.33	.39***
9 バスや電車でお年寄りや障害のある方が立っていたら席を譲ってあげないと可哀想だと感じる	.40	.46***
#10 人のつらい話を聞いても心からは同情できない	.36	.42***
#11 仲間に入れない人がいてもそれはその人の責任だと思う	.33	.34***
12 泣いている子供を見たらついやさしく声をかけたくなる	.52	.56***
#13 いわゆる “お涙頂戴もの” の映画は好きではない	.52	.57***
14 人を思いやることが何よりも大切だと思う	.41	.46***
15 自分が物事が順調な場合, そうでない友人のことを思うと申し訳なく感じる	.39	.45***
16 人に対しては常に親切でいようと思う	.51	.54***
17 自転車が将棋倒しになっているのを見たら, 起こしてあげたいと思う	.54	.57***
18 ニュースで事故などの報道に接すると心が痛んでしまう	.43	.45***
#19 一人一人の主張がぶつかることによって傷つく人がいても仕方がないと思う	.37	.41***
#20 弱い立場にある人も自分で何とかするべきだ	.39	.46***
21 苦労話を聞くと心を打たれる	.61	.59***
22 映画やテレビドラマをみてよく泣く	.49	.55***
説明率 (%)	19.8	

#は逆転項目, *** $p<.001$.

注) 項目 2 の因子負荷量はこのデータでは .21 と大きいものではないが, その後の追試によって安定した因子負荷量 (>.30) が得られている。

“行ったことがある”場合と冷淡な行動を“行ったことがない”場合を1点、その逆を0点として、行動指標5項目の得点総和を求め、援助行動得点とした（得点範囲：0-5）。この点数と思いやり尺度の間には有意な正の相関がみられた（ $r=.35, p<.001$ ）。また、これらの相関が思いやり尺度のなかに含まれる“涙もろさ”に関する4項目との重複によるものであるかどうかを検討するため、涙もろさに関する4項目以外の18項目の平均値との相関係数を算出したところ、相関は多少弱くはなったものの、依然として正の方向で有意であった（ $r=.25, p<.01$ ）。この結果は、思いやりの心理傾向は援助行動を促進するというこれまでの知見を追認するものであり、尺度の妥当性を示している。

研究2 思いやりと情動的共感性

思いやり尺度の概念的妥当性は、思いやり傾向と理論的に関連した心理傾向との相関をみることにより確認できる。この目的のために、研究2では情動的共感性を取り上げた。情動的共感性とは、他人が情動状態を経験していると理解した結果、観察者に生じた情動状態のことである（Stotland, 1969）。先に述べたように、他者への共感はいやりの構成要素の一つであると考えられる。この点は共感といやりの発達についての論考とも一致する。たとえば、Hoffman（1975）は、共感（empathy）という原初的感情傾向が自他表象という高次の認知機能と統合されて、思いやり（sympathy）傾向が生まれてくると主張した。すると、各人の思いやり傾向は情動的共感性と強く関連するであろう。

方法

被験者と手続き Mehrabian & Epstein（1972）が作成した尺度に基づいて作成された情動的共感性尺度（加藤・高木，1980）と研究1で作成した思いやり尺度との相関を検討した。大学生男女90名（男性48名，女性42名，年齢18-22才）にこれら二つの尺度

項目をランダムに混ぜて示し、5件法で回答させた（1=全くあてはまらない，5=非常によくあてはまる）。

結果

情動的共感性尺度は“感情的暖かさ”“感情的冷淡さ”“感情的被影響性”の三つの下位尺度からなる。共感性が高いほど感情的に暖かく、冷淡ではなく、被影響性は高いと考えられる。“感情的冷淡さ”の項目を逆転項目として分析を行ったところ、Table 2にまとめたように、これら三つの下位尺度の信頼性はいずれも高かった（ α 欄）。思いやり尺度の信頼性係数も研究1同様十分に高かった。加藤・高木による先行研究（1980）に一致して、各尺度の平均得点は、女性のほうが男性より高かった。次いで情動的共感性と思いやり傾向との相関をみたところ、思いやりと感情的暖かさ、感情的冷淡さの間には非常に強い相関がみられた（ $r=.72, p<.001, r=.70, p<.001$ ）。また、感情的暖かさとは冷淡さの相関も高かった（ $r=.55, p<.001$ ）。これに対して感情的被影響性は、これら3変数と正の方向で相関していたが、その数値は相対的に弱かった。思いやりは、相手の立場に立ってその人のためになるように考えることであり、単に相手と同じような感情を自動的に感じるという以上のものを含むと考えられる（Eisenberg & Mussen, 1989 菊池・二宮訳，1991）。感情的被影響性が思いやり傾向とは比較的相関が低いという結果は、このような分析に適合している。

思いやり尺度と情動的共感性尺度の相関は、思いやり尺度に情動的共感性尺度に含まれる項目（涙もろさに関する項目）があるためである可能性がある。そこで、思いやり尺度22項目から涙もろさに関する4項目を取り除いた値とも同様の相関がみられるかどうかを検討したところ、感情的暖かさとは $r=.72$ （ $p<.001$ ）、感情的冷淡さとは $r=.69$ （ $p<.001$ ）、感情的被影響性とは $r=.32$ （ $p<.01$ ）というように、いずれにおいても涙もろさに関する項目を含んだ場合と同程

Table 2
思いやり尺度と情動的共感性尺度

	α	平均 (SD)		相関		
		男 (N=48)	女 (N=42)	2	3	4
1. 思いやり尺度	.85	3.15 (.61)	3.58 (.42)***	.72***	.70***	.35**
情動的共感性尺度						
2. 感情的暖かさ	.69	3.43 (.66)	3.90 (.32)***		.55***	.33**
3. 感情的冷淡さ	.66	3.31 (.59)	3.66 (.48)**			.32**
4. 感情的被影響性	.62	3.19 (.68)	3.61 (.63)**			

** $p<.01$, *** $p<.001$.

度の相関が得られた。

これらの結果は、思いやり傾向には相手に対して共感し、暖かい感情を向けることが含まれるとする我々の分析に一致する。さらに今回の結果は、菊池(1988)の報告した向社会的行動尺度と情動的共感性尺度との相関とほぼ同様の傾向のものであった(菊池, 1988, 1998)。

研究3 思いやりと相互独立性, 相互協調性

思いやり尺度の概念的妥当性をさらに検討するために、研究3では自己認識にかかわる変数を取り上げた。近年の文化心理学の理論的分析によると、欧米の社会に存在する日常的習慣や社会制度、さらにはさまざまな常識的理解の枠組みには、(1)人とは周リから切り離され独立し、(2)意見・態度・能力・動機・性格特性などといった永続性や一貫性をもった内的な属性によって定義づけられた存在であり、(3)その行動はこのような内的属性にしたがって、周囲に影響を与える手段である、というモデル(相互独立的自己観)に基づいて成り立っているものが多いとされる。これに対して、東洋の社会に存在する文化の諸要素には、(1)人とは周囲と密接に結びつき、(2)そのような結びつきを通じて生まれる社会的関係性のなかで定義づけられた存在であり、(3)その行動は社会的関係性に自らを調整していくものであるというモデル(相互協調的自己観)に基づいて成り立っているものが多いとされる(Markus & Kitayama, 1991)。そして特に日本文化において思いやりに基づいた文化慣習が多くみられるというこれまでの知見から考察すると、相互協調的自己観は“思いやり”という形態をとって日本社会のなかに歴史を通じて根付いてきたと考えられる。これら文化レベルの慣習に反映された自己観は、個人レベルの行動傾向にも反映されているであろう。なぜなら、行動傾向や性格特性などにみられる個人差は、当該の文化慣習や常識を受け入れ、それにそって行動したり、あるいはそれらを拒絶し、それと反するように行動したりする程度の個体間の分散のことであると考えられるからである。

思いやりとは相互協調性の一側面であるとする、各人の思いやりの心理傾向と相互協調性の間には強いつながりがあると予測できる。さらに、相互協調性と独立性とは一般に独立の次元であることから、思いやりは相互独立性とは結びついていないことが予測される。これらの予測を検証するために研究3では、研究1で開発した思いやり尺度とSingelis(1994)による相互独立性(independence)、相互協調性(interdependence)尺度との間の相関を検討した。加えて、これらの心理傾向と各人の自尊心の程度との関連も検討した。思いやりが相互協調性の現れの一つの形態であるように、自尊感情は相互独立性の現れの一つであると

したら(Kwan, Bond, & Singelis, 1997)、自尊傾向は相互独立性とは正の相関をもつが、相互協調性や思いやり傾向とは独立であろうと予測される。

方法

被験者と手続き 大学生男女125名(男性81名、女性44名、年齢18—23才)に、思いやり尺度、Rosenberg(1965)の自尊心尺度(山本・松井・山成訳, 1982; Heine, 1996)⁴、Singelis(1994)による相互独立・相互協調性尺度の邦訳版(Heine, 1996)⁵に5件法(1=全くあてはまらない、5=非常によくあてはまる)で回答させた。

結果

用いた4尺度の信頼性は、Table 3の α 欄に示したようにおおむね高いものであった。特に思いやり尺度は、研究1や2と同様、十分な信頼性を有していた。各尺度の平均値を男女別に分析したところ(Table 3参照)、思いやり尺度の得点は女性のほうが高かったが、自尊心、相互独立性、協調性に関しては男女差はみられなかった。次いでこれら4変数の相関をみたところ、予測どおり思いやりは相互協調性と($r=.55, p<.001$)、自尊心は相互独立性と($r=.30, p<.001$)それぞれ正の相関を示した。さらに、思いやりは自尊心や相互独立性とは相関をもたず($r=.02, ns, r=.06, ns$)、自尊心は相互協調性とは相関をもたなかった($r=-.04, ns$)。最後に相互独立性と協調性の間には弱い負の相関がみられた($r=-.19, p<.05$)。これらの結果から、思いやりは相互協調性と、また自尊心は相互独立性と結びつき、ほぼ独立の因子を構成しているさまがうかがわれる。この点を確認するために、思いやり、相互協調性、自尊心、相互独立性の4変数を対象に主因子法による因子分析を行いバリマックス解を求めたところ、Table 4にまとめたように、前者二つは第1因子に、後者二つは第2因子に高い負荷をもった。この結果は、思いやりが相互協調性の下位概念を構成し、自尊心が相互独立性の下位概念を構成するという可能性と適合する。

⁴ 山本他訳(1982)をもとに、Heine(1996)が訳出したものをを用いた。“全体的に私は自分自身に満足している”“私はもっと自尊心がもてればいいのになと思う”(逆転項目)など10項目。

⁵ 相互独立性尺度は“自立できることは私にとってとても重要なことである”“いろいろな面で他の人とは違うユニークな自分が好きである”、など14項目。相互協調性尺度は“自分の所属するグループの中で調和を保つことは私にとって大切である”“私はしばしば自分の業績よりも他人とのつきあいのほうが大切だと感じる”、など15項目。

Table 3
思いやり、自尊心、相互独立・協調尺度の信頼性、平均値と相関

	α	平均 (SD)			相関		
		男 (N=81)	女 (N=44)	性差	2	3	4
1. 思いやり尺度	.83	3.09 (.54)	3.41 (.47)**		.02	.06	.55***
2. 自尊心	.82	3.35 (.75)	3.40 (.71)			.30***	-.04
3. 相互独立	.68	3.35 (.44)	3.52 (.51)				-.19*
4. 相互協調	.77	3.09 (.50)	3.10 (.61)				

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$.

Table 4
思いやり尺度、自尊心尺度、
相互独立・協調尺度
の因子分析

	第1因子	第2因子
思いやり	.73	.11
相互協調	.79	-.17
自尊心	.01	.36
相互独立	-.05	.80
説明率(%)	28.9	20.4

考 察

本研究では、日本文化における思いやりの概念の重要性を指摘したうえで、思いやり傾向の個人差を測定する尺度を開発した。三つの独立のサンプルを対象にした調査からこの尺度は十分な信頼性をもつことが示された。次いで、尺度の妥当性を検討するために他の関連指標との相関をみたところ、思いやり傾向とともに向社会的行動傾向は増加し（研究1）、またそれは情動的共感性と高い正の相関を示した（研究2）。さらに、思いやりは相互協調性と正方向で相関するが、相互独立性や自尊心とはほぼ独立であること、そして後者二つは正方向で相関するため、思いやりと相互協調性、自尊心と相互独立性のそれぞれは高次の直交因子を構成することを示した（研究3）。今後この尺度を用いて、“相互思いやりの”と仮定される日本における人間関係の深層をより綿密に検討することが可能になるであろう。実際我々は、思いやり傾向とともに、向社会的行動傾向や他者からの援助傾向の主観的頻度が増加するという結果を得ている（北山・内田、1998）。この事実は、日本においては思いやり傾向は援助行動を動機づけるばかりでなく、他者からの援助を誘発するため互恵関係の予測因ともなっていることを示している。

従来の比較文化的アプローチのなかでは、相互協調性という高次の概念に注目した尺度（たとえば、伊藤、1993；木内、1995；Singelis、1994；高田、1995）

が用いられてきた。これに対して我々は高次の概念である相互協調に含まれる要素の一つである“思いやり”に注目して尺度作成を行った。相互協調のなかには、伝統・規律・役割・協力などのさまざまな下位概念が含まれているが、このなかでも思いやりは社会関係への情緒的関与の指標であると考えられる。今後は相互協調などの高次の概念に注目した尺度と同時に、思いやりなどの特定の側面に注目した尺度を併用することにより、より理論的な分析が可能になると考えられる。

最後に、思いやりなどの他者との情緒的関与は、人類に比較的共通にみられる特性であるとされている。たとえばSmith (1976) は“sympathy”を仲間意識 (fellow feeling) と名付け、集団の凝集性の基盤であるとした。今回我々は特に日本の文化慣習を勘案して思いやり尺度を作成したが、この尺度が日本以外の文化における社会関係への情緒的関与の程度の測定に際しどの程度の妥当性をもつかは、今後の研究により明らかにしていく必要がある。そのような試みを通じて、社会関係への情緒的関与が個々の文化により多様な形式で育まれているさまが明らかになることであろう。

引用文献

- 東 洋 1994 日本人のしつけと教育 東京大学出版会
(Azuma, H. 1994 *Japanese discipline and education*. Tokyo: Tokyo University Press.)
Davis, M. H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidences for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
土居健郎 1980 甘えの構造 弘文堂
(Doi, T.)
アイゼンバーグ N.・マッセン P. H. 菊池章夫・二宮克美 (訳) 1991 思いやり行動の発達心理 金子書房
(Eisenberg, N., & Mussen, P. H. 1989 *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.)

- ゴードン L. V.・菊池章夫 1981 価値の比較社会心理学——理論と測定法—— 増補版 川島書店
(Gordon, L. V., & Kikuchi, A. 1981 *Social psychology of values*. Tokyo: Kawashima Shoten.)
- 浜口恵俊 1988 “日本らしさ”の再発見 講談社
(Hamaguchi, E.)
- 原田純治・狩野素明 1980 援助行動に及ぼすパーソナリティ要因の効果 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), **25**, 83-88.
(Harada, J., & Kano, S. 1980 The effects of personality factor on helping behavior. *Research Bulletin of the Faculty of Education (Educational Psychology Section)*, *Kyushu University*, **25**, 83-88.)
- Heine, S. J. 1996 Culture and the need for positive self-regard: The Japanese case. Unpublished doctoral dissertation, University of British Columbia.
- Hoffman, M. L. 1975 Altruistic behavior and the parent-child relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 937-943.
- 伊東秀章 1996 援助行動の質——援助の質の高さと関連する性格特性とジェンダー—— 実験社会心理学研究, **36**, 261-272.
(Ito, H. 1996 The quality of helping behavior. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **36**, 261-272.)
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **64**, 115-122.
(Ito, M. 1993 Construction of an individual and social orientedness scale and its reliability and validity. *Japanese Journal of Psychology*, **64**, 115-122.)
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共同性の特徴 筑波大学心理学研究, **2**, 33-42.
(Kato, T., & Takagi, H. 1980 Characteristics of the emotional empathy in adolescence. *Tsukuba Psychological Research*, **2**, 33-42.)
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する——向社会的行動の心理とスキル—— 川島書店
(Kikuchi, A.)
- 菊池章夫 1998 また/思いやりを科学する 川島書店
(Kikuchi, A.)
- Kitayama, S., & Markus, H. R. 1999 Yin and yang of the Japanese self: The cultural psychology of personality coherence. In D. Cervone & Y. Shoda (Eds.), *The coherence of personality: Social cognitive bases of personality consistency, variability, and organization*. New York: Guilford. Pp. 242-302.
- 北山 忍・内田由紀子 1998 日本的自己と相互思いやりの人間関係——尺度作成と仮説の検証—— 日本グループ・ダイナミクス学会第46回大会発表論文集, 270-271.
(Kitayama, S., & Uchida, Y. 1998 The Japanese selves and mutually sympathetic relationship: Development and validation of a scale. *The 46th Annual Meeting of the Japanese Group Dynamics Association*, 270-271.)
- 木内亜紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **66**, 100-106.
(Kiuchi, A. 1995 Construction of a scale for independent and interdependent construal of the self and its reliability and validity. *Japanese Journal of Psychology*, **66**, 100-106.)
- Kwan, V. S. Y., Bond, M. H., & Singelis, T. M. 1997 Pancultural explanations for life satisfaction: Adding relationship harmony to self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 1038-1051.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, **40** 523-543.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 桜井茂男 1988 大学生における共感と援助行動の関係 奈良教育大学紀要, **37**, 1 (人文・社会), 149-153.
(Sakurai, S. 1988 The relationship between empathy and helping behavior in college students. *Bulletin of Nara University of Education*, **37**, 1 (Cultural and Social Science), 149-153.)
- Shweder, R. A., & Bourne, E. J. 1984 Does the concept of the person vary cross-culturally? In R. A. Shweder & R. A. Levine (Eds.), *Culture theory: Essays on mind, self, and emotion*. Cambridge, England: Cambridge University Press. Pp. 158-199.
- Singelis, T. M. 1994 The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 580-591.
- Smith, A. 1976 *The theory of moral sentiments*. In D. D. Raphael and A. L. Macfie (Eds.). New York: Oxford University Press.
- Stotland, E. 1969 Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 4. New York: Academic Press. Pp. 271-314.
- 杉森伸吉 1996 共感性と向社会的行動 児童心理学の進歩, **35**, 158-192.
(Sugimori, S.)
- 鈴木隆子 1992 向社会的行動に影響する諸要因——共感性・社会的スキル・外向性—— 実験社会心理学研究, **32**, 71-84.
(Suzuki, T. 1992 Some factors influencing prosocial behavior: Empathy, social skill and extraversion. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **32**, 71-84.)
- 鈴木孝夫 1973 ことばと文化 岩波書店
(Suzuki, T.)
- 高木 修 1998 人を助ける心——援助行動の社会心理学—— サイエンス社

- (Takagi, O.)
 高田利武 1995 日本の自己の構造——下位様態と世代差—— 心理学研究, **66**, 3, 213-218.
 (Takata, T. 1995 The structure of self in Japanese culture: Aspects and age differences. *Japanese Journal of Psychology*, **66**, 3, 213-218.)
 Travis, C. 1998 *Omoiyari* as a core Japanese value: Japanese-style empathy? In A. Angeliki & T. Elzbieta (Eds.), *Speaking of emotions: Conceptualization and expression*. Berlin: Mouton de Gruyter. Pp. 55-81.
 Triandis, H. C. 1995 *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press.
 山口 勸(編著) 1998 社会心理学——アジア的視点から—— 三訂版 放送大学教育振興会 (Yamaguchi, S.)
 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68. (Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamanari, Y. 1982 The structure of perceived aspects of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **30**, 64-68.)
 ——1999. 1. 21 受稿, 2001. 1. 13 受理——